

今月から一年ほど担当します。初回は所信表明演説せよ、とのことです。正直言うとこの欄はやりたくないなつた。何しろ評者の方々みなさんじことなく不機嫌をうで、そりやそうでしょう、縮め切りはきつい。スペースは小さいし、「なんかもの読ませやがつて」といいら感も噴出。実はこの「いらいら感」は編集部の狙いいらしく一刀両断がつた切りを演出したいとか。でも、私はぶつた切りには不賛成。小説が探点されるなら評者の方も探点されるべきでは? 「反論コトナ」もあっていい。せつかくの品評会「俺はパスタを食いたいのに、中華料理なんて出しやがつて」的な理不尽な評にならないよう、何料理が出されたのか見極めたい。

で、今月の作品。成井昭人の「どうにやいと」(群像)はホラ話風の話題が亮りの暗転型冒険譚。ボクサ崩れの主人公が家業を継いでお父の行商に歩き、日本海側の町を訪れるも身動きとれなくななる。馴れ馴れしい語りの読み心地

がすこいいけれど、どうじん展開した分フィニッシュの「炸裂」がやや緩く感じる。同著者の掌編「あんこ」(すばる)の方が詐欺に遭った元取扱が「スナップを利かせ」て借金取りにあんこを投げつける話——分量二十分の一でもインパクトが強いのが不思議。

本谷有希子の「トモ子のバウムクーベン」(新潮)は冒頭の「トモ子には、この世界が途中で消さ

新人小説月評

遭遇するとおかしくなるというあたりにゾクッとした。

「すばる」の「新年掌編競作」は見開き一頁ながらけつこう詮ませるものも。古川日出男「あしあと」はワーカシヨップの話らしいが、後出しジャンケンだらけの語りで一步進むことに足元の視界がわっと広がり、「そういう話だったたの? え? え?」と思う。これだけ読むと、古川は天才だと

阿部公彦

御節料理を食つ

れてしまうクイズ番組だということが、突然理解できた」という比喩的、ヒットしそこねたよくなきくしゃく感がいきなり神経に障る。この変な感じを抱えた主人公はじたばた動こうとしても地面に足が張り付いてしまうような神絶と体のバランスの悪い人で、どこにも落着しない言葉や気分にまみれている。読書中に「ふいに」「なぜか」「なんとなく」という言葉に

思う人もいるかもしれません。山崎ナオコ「工感覚」はいつもながらネーミングの度で出だしがうまく滑走させ、後半、しつとり上手にまとめる。この短さで物語に「波」を感じた。万城目学「スバ一千代子」。全体がむつり取り澄ましているが、真ん中の「空になつた箱をのぞいたら、ブドウが一粒、はぐれたように転がつていた」との一文だけニヤッと笑う。

うまいなお。前田司郎「お米を宝石だと言う人」。最後の二行の上げ下げが決まっている。三崎重記「コール」。途中あんまり油斷しすぎた人は最終段落でバチがあたる。村田沙耶香「余命」。毒と薬のさじ加減をためす。佐藤友哉「下アマの生成過程」。ジャア、ジャア。山下達人「たのしみでならない」。「もうすぐ芽の出てくる木は暖かい。そして少しだけやわらかい」という感じの小説かと誤解しそうになる。松家仁之「花を刈る」。「なにも言えなかつたし、言わなかつた」というトーンで統一されている。と、ここまで来たところで編集部よりひょろつとメール。「たいへんです!『文學界』掲載の篠原勝之「花喰い」も新人でした!」とのこと。慌てて読むと、なんだかの映画「キャタピラ」に出てくる岡采役の人が書いている。故若松監督に捧げたオマージュで、語るに忙しく小説どころじゃないかと思いつか、監督が夜中に咳き込む場面などけつこういい。ぐいぐい読みたい作品。

「印象に残つた」式の曖昧な書き方だけはやめよう。過去の先輩担当者の中で筆者が面白く読んでいたのは、評者の意見が明確にわかる書き方。面白い小説群を相手にするのだからこちらも面白く読んでもらいたい。最近では栗原裕一郎が◎○△×評価たつた(前著者の一人)清水良典は第一回で◎の作品を讀んだあと「ここからは○か△の作品だ」と書いて思い切り曖昧なので笑つた……でも、いう面白さは目指したくない。筆者がこの数年やつている文芸誌の新人賞の下読み作業はA B C評価だ。これを採用したい。下読みでもそうなのだが必ずAがある。「Aはない」はない。人は目の前にあるものからしか判断できない。想像上の「A」(想像上の「○」)など存在しないのである。取り上げる「新人」作品は編集部からの指定作品リストによる。とはいえて必要に応じて指定以外の作品も取り上げたい。「面白く読んでもらいたい」と書いたのは、この評は、読者のために書くからだ。こんな

真まで讀んでくれる君なら、ハックナンバーをたどつてくれるにちがいない。小説は長寿ではないかもしないが、一ヶ月やそこらで賞味期限が切れはしないから、どうか彼らを見捨てないでほしい。では、さつそくいきます。Aは本谷有希子「トモ子のバウムクーベン」(新潮)。一人の可愛い我が子のためにお母さんのトモ子がバウムクーベンを焼いている。最後に

子はソファに横になる。筆者も少ししつづけて、前めりになつて讀んでしまつた。最後まで読み、ふたたび冒頭の「コソロの火を弱火にしていると、」にもどれば、その書き出しが、いかにも微妙な手続きの震えを感じさせるやバイ動きに見えてくる。一度目からも力強い。Bは成井昭人「どうにやいと」(群像)。亡き父の商売を受け継いでお父の行商にとある村へと

新人小説月評

福永信

地に足をつけない作家たち

はちやんと懇きあがり、失敗はしてなきそつうのだから見た目には何も起つていなければ。幸福そのもの。しかしトモ子を取り巻く文章は冒頭から、カーテンや飼い猫などを織りながら彼女を不安定な方向へ導く。トモ子は自力で動いているのではなく、文章の不可視の傾斜によつて動かされていくようだ。自分で停止することはできず、立つていられない(トモ

赴く)。するとその村から出られない。なのにあんまり焦つてない主人公がたのもしい。様々な村人とトトクには笑わせられる。女の尻も色っぽい。ではなくBか。文学でござり的国式が見え隠れするところだ。過去や幻想を断片的に織り込みながら現在が次第に混迷していく。主人公が足を踏み入れ、また仰ぎ見る過去や現在、未来を象徴する山々に物語は無関係

でいられない。その山と自身の關係をあつさり語ってしまうところもある。これが邪魔だ。後半(八十八頁以降)、村から出られない主人公が疲労を自覺するあたりから作者の手つきも俄然好い加減になつてきて、ここからが大好きだ。地に足がつかないところが下半身までめりこんでしまうラストにはまったく座布団一枚でも足りない。Cは篠原勝之「花喰い」(文學界)。前作「骨風」(文學界二〇一三年七月号)と同じく作者自身が主人公。このあけすけさがクマさんのイイところだ。若松孝二監督「キャタピラ」に出演したときの思い出と、自身の子供時代の記憶を描いたエッセイ風の作品。若松監督との交遊自体は貴重な記録だが、それはぜひ本誌エセーで。子供時代のエピソードは面白かった。とくに、戦中、木の橋の上をダダダダと走る大人達の足音におびえる作着を母親が背後からそつと保護してくれる場面など、とても好きだ。しかしそれらのエピソードをつまんでいつても中途半端だ。